芥川龍之介「地獄変」試論

――大殿の運命――

田村　修一

はじめに

大正七年五月、「大阪毎日新聞」に発表された「地獄変」は、「心熱が燃えてゐる」と絶賛した正宗白鳥をはじめ、今日に至るまで概ね高い評価を得てきている作品である。しかし娯楽的にも楽しめる作品である一方、作品解釈は難しく、研究対象として今まで数多く論じられてきた。それらはおもに娘をめぐっての肉親愛と芸術との葛藤、あるいは良秀の縊死をめぐる倫理と芸術との葛藤など、「芸術至上主義」とのかかわりで論じられることが多かったように思う。しかし私は主題の考察については別の機会に譲り、本稿においては今まで十分に論じられてきたとは思われない、大殿についての考察をすすめていき、主題論へのステップとしたいと思う。

一、大殿の形象

芥川が小島政二郎宛に送った書簡の中に、次のような一節がある。有名なものであるが引いてみたい。

あのナレエションでは二つの説明が互にからみ合つてゐて（ママ）それが表と裏になつゐるのです　その一つは日向の説明でそれはあなたが例に挙げた中の多くです　もう一つは陰の説明でそれは大殿と良秀の娘との関係を恋愛ではないと否定して行く（その実それを肯定してゆく）説明です　この二つの説明はあのナレエションを組み上げる上に於てお互にアクテユエエトし合ふ性質のものだからどつちも差し抜きがつきません　〔大正七年六月十八日〕

芥川によれば語り手が大殿と良秀の娘との関係を否定していく説明はすなわちそれを肯定しているということになる。具体的に作品の中から抜き出してみよう。

「大殿様が良秀の娘を御贔屓になつたのは、全くこの猿を可愛がつた、孝行恩愛の情を御賞美なすつたので、決して世間で兎や角申しますやうに、色を御好みになつた訳ではございません。（中略）こゝでは唯大殿様が、如何に美しいにしたと云ふ事を、申し上げて置けば、よろしうございます」（第三章）

「大殿様が娘の美しいのに御心を惹かされて、親の不承知なのもかまはずに、召し上げたなどと申す噂は、大方かやうな容子を見たものゝ当推量から出たのでございませう」（第五章）

「そこで大殿様が良秀の娘に懸想なすつたなどゝ申す噂が、愈々拡がるやうになつたのでございませう。中には地獄変の屏風の由来も、実は娘が大殿様の御意に従はなかつたからだなどと申すものも居りますが、元よりさやうな事がある筈はございません」（第五章）

「それは元より気立ての優しいあの娘を、御贔屓になつたのには間違ひございません。が、色を御好みになつたと申しますのは、恐らく牽強付会の説でございませう。いや、跡方もない嘘と申した方が、宜しい位でございます」（第五章）

「先第一に何故大殿様が良秀の娘を御焼き殺しなすつたか、—これは、かなはぬ恋の恨みからなすつたのだと云ふ噂が、一番多うございました。が、大殿様の思召しは、全く車を焼き人を殺してまでも、屏風の画を描かうとする絵師根性の曲なのを懲らす御心算だつたのに相違ございません。」（第二十章）

こうして見ると、かなり執拗に噂を否定していることがわかるが、逆にその執拗さがかえって噂を肯定する効果を生み出していると言えるであろう。つまり語り手の語りをことごとく逆に読んでいけば、大殿は好色であり、良秀の娘の美しいのにひかれて召し上げ、娘に懸想したが思いどおりにならなかったために焼き殺したという本筋が浮かびあがるのである。ついでにみると、娘との関係を否定するのではないが、世間の噂を否定する語りが早くも第一章に出てくる。

「早い話が堀川のお邸の御規模を拝見致しましても、壮大と申しませうか、豪放と申しませうか、到底私どもの凡慮には及ばない、思い切つた所があるやうでございます。中にはまた、そこを色々とあげつらつて大殿様の御性向を始皇帝や煬帝に比べるものもございますが、それは諺に云ふ群盲の象を撫でるやうなものでもございませうか。あの方の御思召は、決してそのやうに御自分ばかり、栄燿栄華をなさらうと申すのではございません。それよりはもつと下々の事まで御考へになる、云はば天下と共に楽しむとでも申しさうな、大腹中の御器量がございました。」

この語りも結局のところ、噂を否定しながら実は噂の通り、大殿は始皇帝や煬帝にもたとえられる、非情な独裁者であるという

ことを語っているのであろう。つまりこのように、語り手の賞賛にもかかわらず、この大殿は実際は残忍で好色な人物であることは作品を一通り読めば分かることである。そのことは「わかりやすい」ということになっているが、[1]微妙な問題をはらんでいる。読者は初めてこの作品を読んだとき、いったいどのあたりで大殿の正体を見破るのであろうか。また、作者はどのあたりで「ばれる」ことを計算して書いているのであろうか。少なくとも第一章で早くも大殿の正体を見抜いてしまうような読者は皆無と言っていいだろう。「堀川の御邸の御規模を拝見致しても、壮大と申しましょうか」とか、「長良の橋の橋柱に御寵愛の童を立てた事もございますし」と言った叙述に早くも大殿のうさん臭さを感じる読者もあるかもしれないが、やはりこの作品が成功するには、牛車に乗せられているのが良秀の娘であることが語られたとき、相当の衝撃を読者に与えなければならないのであって、カンのいい読者には「あるいはひょっとすると……」という気にはさせたとしても、完璧に予想されてしまっては、この作品の価値は低下してしまう。そういう意味では、この作品は、ギリギリのところで、見事な勝利を収めているのである。「ギリギリのところ」というのは、「うさん臭さ」を垣間見せながらも、牛車に火をかけるところまでは完全には正体を暴露せず、娘の乗る牛車に非情にも火を掛け、正体を暴露してしまうと、それまで垣間見せた「うさん臭さ」の記述が見事に生きる、絶妙の語りのことを言っているのである。つまり、大殿が娘の乗った車に火をかけるまでには、大殿の好色さ・残忍はさきほど述べた理由により、灰色のヴェールに包まれていなければならず、そしていったん火をかけると、大殿の正体が火を見るよりも明らかになるという、見事な構成になっているのである。

さて、大殿にモデルがあったのかという問題にも少し触れておきたいが、この問題についてはすでに長野甞一氏による指摘があり、[2]それによれば平安朝に「堀川の某」と言われた大臣が、藤原基経（堀河太政大臣）・藤原兼通（堀川殿）・藤原顕光（堀川左大臣）・藤原頼宗（堀河右大臣）の四人いるという。[3]しかし「地獄変」本文によると、時代は「陸奥の戦い」（いわゆる前九年の役）の後という設定になっているので、それに合致するのは頼宗しかいなくなるわけであるが、長野氏は次のように結論づける。「頼宗は関白道長の子、母は左大臣高明の女であるが、その没したのは一〇六五年で、齢は七十三歳、前九年役終了の三年後である。だからそんな高齢で小女房に懸想するようなわけにはゆかぬ。（中略）むしろ性格だけは藤原道長のそれを念頭においたのではあるまいか。しかし名前や時代は変えており、要するに芥川の創作に成る人物で、モデルらしいモデルはないというのが当っていよう」。私としてはもう付け加えるものもないようなものであるが、藤原道長の影響というのは、根拠のないことではないように思える。というのも、道長の日記「御堂関白記」に、道長が絵師に「地獄変屏風」を描かせた記事が出ているからである。それは長和四年十二月十九日の記録で、「地獄変御屏風画画師等賜禄」

と記されているのである。芥川が「御堂関白記」を読んだかどうかは不明であるが、「御堂関白記」に触れる発言がある。

芥川　僕は、安倍晴明なんといふ人は伝説の人物かと思つてゐたら、近衛さんの具注暦を見ると、道長の日記に安倍晴明来るといふことが書いてありますね。（「柳田国男・尾佐竹猛座談会」、『文藝春秋』昭二・七）

道長の影響については可能性としては充分あることを指摘しておきたい。

二、大殿堕地獄の暗示

さて作品のクライマックスで炎に包まれた娘を前に良秀が恍惚とした法悦の輝きを浮かべている一方、大殿の方は「御顔の色も青ざめて、口元に泡を御ためになりながら、紫の指貫の膝を両手にしつかり御つかみになつて、丁度喉の渇いた獣のやうに喘ぎつゞけていらつしやいました。……」と描写される。従来ここは、例えば細川正義氏が「世俗の権力を絶対とする大殿の敗北と、芸術絶対の良秀の勝利が明確に描かれる」と論じたように、[4]芸術家の勝利に対する権力者の敗北という図式でとらえられることが多いところであるが、もっと別の見方もできるのではないだろうか。ここで思い出されるのは、良秀が女性を乗せた車を焼くように願い出たことが聞き入れられたときの、良秀の「急に色を失つて喘ぐやうに唯、唇ばかり動かして居りましたが」という描写であるが、この二つは明らかに関連があると思われる。良秀の場合は、自らの芸術の完成の為に一人の女性を犠牲にしようとした罪からくるものであると私は考えているが、とすると、大殿の場合は実際に良秀の娘を焼き殺したという罪からくるものではないだろうか。では、良秀の罪が目の前で娘が焼き殺されるという「地獄の責苦」を体験させられる結果（罰）を招来したとすると、大殿はどうなるのであろうか。そこで考えられるのが、地獄に落ちるのは実は大殿であることが暗示されているのではないだろうかということである。このことについては一つ気になるところがあり、それは地獄変作成の合間、昼寝中に良秀が口走ったという寝言の内容である。寝言の部分だけ抜き出すと、こうなる。

「なに、己に来いと云ふのだな。—どこへ—どこへ来いと？奈落へ来い。炎熱地獄へ来い。—誰だ。さう云ふ貴様は。—貴様は誰だ—誰だと思つたら」

「誰だと思つたら—うん、貴様だな。己も貴様だらうと思つてゐた。なに、迎へに来たと？だから来い。奈落へ来い。奈落には—奈落には己の娘が待つてゐる。」

「待つてゐるから、この車へ乗つて来い—この車へ乗つて、奈落へ来い—」

これを見ればわかるように、一人の寝言であるのに内容は二人の会話になっているのである。ここは従来たとえば三好行雄氏が「良秀のみた獄卒は、大殿の化身にまぎれもない」と論じたように、[5]定説となっているのは大殿獄卒説つまり大殿が良秀を迎えに来ているととる説であるが、私は逆に良秀が大殿を迎えに来てい

るものととる。[6] つまり寝言の部分を次のように分解するのである。

（会話例1）
大殿「なに、己に来いと云ふのだな。—どこへ—どこへ来いと?」
良秀「奈落へ来い。炎熱地獄へ来い。」
大殿「誰だ。さう云ふ貴様は。—貴様は誰だ—誰だと思つたら誰だと思つたら—うん、貴様だな。己も貴様だらうと思つてゐた。なに、迎へに来たと?」
良秀「だから来い。奈落へ来い。奈落には—奈落には己の娘が待つてゐる。待つてゐるから、この車へ乗つて来い—この車へ乗つて、奈落へ来い。」

このように分解するのが一番自然であると少なくとも私には思われるし、良秀のものと思われる「奈落には己の娘が待つてゐる」という言葉も矛盾なく収まる。[7] 大殿獄卒説をとるならば右の会話の大殿と良秀を入れ換えなければならないが、そうすると「奈落には—奈落には己の娘が待つてゐる」が大殿の言葉になってしまうため、これは良秀の言葉として独立させ、次の「待つてゐるから、この車へ乗つて来い—この車へ乗つて、奈落へ来い。」は再び大殿の言葉としなければならない。つまり、こうなる。

（会話例2）
良秀「なに、己に来いと云ふのだな。どこへ—どこへ来いと?」
大殿「奈落へ来い、炎熱地獄へ来い。」
良秀「誰だ。さう云ふ貴様は。—貴様は誰だ—誰だと思つたら誰だと思つたら—うん、貴様だな、己も貴様だらうと思つてゐた。なに、迎へに来たと?」
大殿「だから来い。奈落へ来い。」
良秀「奈落には—奈落には己の娘が待つてゐる。」
大殿「待つてゐるから、この車へ乗つて来い—この車へ乗つて、奈落へ来い。」

しかしこの場合、会話例1に比べ、明らかに不自然である。まず、会話例1では「誰だと思つたら・誰だと思つたら」の続きぐあいと、「待つてゐる・待つてゐるから」の続きぐあいはそれぞれ同一の人物の発言であると解釈できるが、会話例2では「誰だと思つたら・誰だと思つたら」は同一人物の発言ととるのに、「待つてゐる」と「待つてゐるから」は別の人物の発言であると解釈しなくてはならなくなる。次に会話例2では良秀の前二つの発言は地獄からの使いが来てびっくりしている様子がよく現れているが、それが急に「奈落には己の娘が待つてゐる」と、まるで覚悟をしているかのような口調になるのは不自然である。三つめに、「うん、貴様だな、己も貴様だらうと思つてゐた。なに、迎へに来たと?」という言い方は、良秀の大殿に対する言葉として

見るよりも、大殿の良秀に対する言葉と見た方が自然である。以上により、ここの寝言は、良秀が獄卒となり大殿を迎えに来ているものととりたい。また「この車へ乗つて、奈落へ来い」の「この車」とは、この時点ではまだ完成していない地獄変屏風の車であろう。[8] つまり、目が覚めているときの良秀は全くそのことを記憶していないようではあるが、[9] 良秀は将来の正夢を見ているのであって、ここで実は地獄に落ちるのは大殿であることが示されていると考えられるのではないだろうか。このことは具体的には作品「邪宗門」に明確に描かれている。「邪宗門」は「地獄変」に遅れること約半年、大正七年十月二三日から十二月一三日にかけて、『大阪毎日新聞』に連載されている（ただし未完のまま中絶）。まず冒頭から見てみよう。

「先頃大殿様御一代中で、一番人目を駭かせた、地獄変の屏風の由来を申しあげましたから、今度は若殿様の御生涯で、たつた一度の不思議な出来事を御話致さうかと存じて居ります。が、その前に一通り、思ひもよらない急な御病気で、大殿様が御薨去になつた時の事を、あらまし申し上げて置きませう。」

周知のことではあるが、これを見ればわかるように「邪宗門」は「地獄変」と同じ語り手によって「地獄変」のその後が語られる設定になっている。そして注目しなければならないことは、その冒頭で大殿の無残な最期を描写していることであり、作品「地獄変」読解の鍵をも与えていると考えられるのである。さて「邪宗門」では先ほどの引用の続きに、大殿が死ぬ前にいろいろ不吉な前兆があったことが語られるが、特に重要なのは次のところである。

「中でも殊に空恐ろしく思はれたのは、或女房の夢枕に、良秀の娘の乗つたやうな、炎々と火の燃えしきる車が一輛、人面の獣に曳かれながら、天から下りて来たと思ひますと、その車の中からやさしい声がして、『大殿様をこれへ御迎へ申せ』と、呼はつたさうでございます。その時、その人面の獣が怪しく唸つて、頭を上げたのを眺めますと、夢現の暗の中にも、唇ばかり生々しく赤かつたので、思はず金切声をあげながら、その声でやつと我に返りましたが、総身はびつしより冷汗で、胸さへまるで早鐘をつくやうに躍つてゐたとか申しました」

つまり、大殿が死ぬ前に、またもや「夢」で大殿の将来が暗示されるのである。もう新しい作品で新しい物語が始まろうとしているのであるから、前兆などはそこそこにして大殿を地獄に落とせばよいと思うのであるが、しつこく「夢」で大殿の将来を暗示させているのは、この女房が見た夢と、「地獄変」で良秀が見た夢との何らかの関連性があることを作者が示唆していると読み取ることもできるのではないだろうか。つまり、「地獄変」の良秀の夢を良秀が大殿を迎えに来るものと解釈すると、「邪宗門」の冒頭で良秀つまり「唇ばかり生々しく赤」い「人面の獣」が大殿を迎えに来る女房の夢と見事に一致するのである。「車の中のやさしい声」の主は、やはり大殿に焼き殺された良秀の娘と解釈す

るのが一番穏当であろう。[10] そして「炎々と火の燃えしきる車」は大殿を炎熱地獄＝奈落に送り込む火の車の象徴であると思われる。良秀の娘はその中に、「奈落には己の娘が待ってゐる」というわけである。さてこのような前兆があってとうとう大殿は悶死する。

「今出川の大納言様の御屋形から、御帰りになる御車の中で、急に大熱が御発しになり、御帰館遊ばした時分には、もう唯『あた、あた』と仰有るばかり、あまつさへ御身のうちは、一面に気味悪く紫立つて御褥の白綾も焦げるかと思ふ御気色になりました。元よりその時も御枕もとには、法師、医師、陰陽師などが、皆それぞれに肝膽を砕いて、必死の力を尽しましたが、御熱は益烈しくなつて、やがて御床の上まで転び出ていらつしやると、忽ち別人のやうな嗄れた御声で、『あおう、身のうちに火がついたわ。この煙りは如何致した。』と狂ほしく御叫びになつた侭、僅三時ばかりの間に、何とも申し上げる語もない、無残な御最後でございます。[11]」

今までの文脈から見ると、ここのところは、大殿の魂は「炎々と燃えしきる火の車」に乗せられ、火だるまとなって奈落へと堕ちていく描写であると言えるであろう。しかし「邪宗門」は「地獄変」と同じ語り手によって大殿の死と若殿様の時代の出来事が語られるという設定になっているとは言え、あくまでも「地獄変」の後にかかれた別作品である。とすると「地獄変」の作品だけで普通にストーリーを追っていくと、良秀親子の言ってみれば無残な最後に比べ、大殿は多少の精神的打撃を与えられたにしてもあとはのうのうと暮らしていけるととられかねず、それではあまりにもバランスを欠く結果になってしまう。そこで、作者の頭の中には「地獄変」を書いた時点で本当に地獄に落ちるのは大殿であるという認識はあったであろうから、作品「地獄変」の中にも大殿が地獄に落ちることを暗示するようなところを書いていたとしても、それほど不思議ではないと思われる。というわけで私は、良秀の会話風の寝言や大殿が口元に泡をためて喉の渇いた獣のように喘いでいたといった描写が、大殿の地獄落ちの暗示をしていると読み取ることは可能であると考えるのである。

おわりに

以上の考察により、私は語り手の賞賛とは対照的に、作家芥川の頭の中には地獄へ落ちるべき人物は大殿であるという問題意識は強力に存在し、作品の中にもその思いは込められていると考える。とすると、それでは良秀やその娘は一体どうなったのかという疑問が生じるであろうが、私自身は、自らの芸術の為に人一人犠牲にしようとした良秀の罪は、汚れなき娘の死により贖われたのではないかと考えている。またそこから私はこの作品のクライマックスにおける良秀の恍惚は、従来言われてきた「芸術至上主義」とは別の性質を持ったものではなかったのではないかと想像してもいるが、それは作品の主題にかかわる問題であり、紙幅も尽きたようであるし、冒頭にも述べたようにその問題はまた別の機会に論じたいと思う。

〔注〕

(1) 浅野洋氏の「この語りの逆説的なパターンは誰の目にもわかりやすい」(「地獄変」の限界―自足する語り―　『文学』一九八八・五)という指摘がある。

(2) 長野嘗一　(第九章「地獄変」『古典と近代作家―芥川龍之介』一九六七・四)

(3) 佐藤あけみ氏はさらに源俊房を加え、五人としている。(『地獄変』論　『国語と教育』　(大阪教育大学)一九七五・三)

(4) 細川正義　芥川「地獄変」の世界　『人文論究』(関西学院大学)一九七四・八

(5) 三好行雄　『地獄変』について―芥川龍之介論へのアプローチII―　『國語と國文学』　一九六二・八

(6) 良秀獄卒の可能性はかつて渡辺正彦が指摘したことがある(芥川龍之介「地獄変」覚書―その地獄へと回転する構造―『日本近代文学』一九八〇・一〇)

(7) 笹淵友一氏は「生前何の罪も犯していない娘の無辜の死が、地獄の業火の運命に直結するいわれは全くない」と指摘しているが(芥川龍之介「地獄変」新釈　『文学』一九七九・十二)、確かにこの部分において無辜の娘が「奈落」で待っている、つまり地獄に落ちているというのは不合理である。ただ私の場合、良秀の夢は将来良秀が大殿を迎えに来る前兆として解釈しているので、ここは大殿に焼き殺された娘と同じ炎熱の苦しみを体験させるという、復讐的なニュアンスで読んでおきたい。それは作品「邪宗門」冒頭部分の女房の夢と関連性があると考えるが、後述したい。

(8) 清水康次氏は「良秀が夢に見る火の車は一般に地獄からの使いを意味するが、『今昔物語集』においても火の車が堕地獄のしるしとして夢に現れることがある」と指摘し、『今昔物語集』巻第十五「造悪業人最後唱念仏往生語第四十七」より具体例をあげている(『芥川文学の方法と世界』一九九四・四和泉書院所収「『地獄変』の構造」)。また信多純一氏は「芥川龍之介『地獄変』絵解」(『にせ物語絵―絵と文　文と絵』平凡社一九九五・四所収)で五趣生死輪図と「地獄変」との関連性を指摘しているが、私にはその本の二七八・九ページに載せられている『往生要集絵巻』の、獄卒が罪人を地獄に送りこむ火の車の図が興味深かった。

(9) 笹淵友一氏は作品の中の「又獄卒は、夢現に何度となく、私の眼に映りました。私は牛頭、或は馬頭、或は三面六臂の鬼の形が、音のせぬ手を拍き、声の出ぬ口を開いて、私を虐みに参りますのは、殆ど毎日毎夜のことと申してもよろしうございませう」(傍線田村)という箇所を根拠に「作者は明らかに、良秀は獄卒の声を聞いていない、より正確に言えばさきの譫言(良秀の寝言のこと―田村注)を覚えていないことを読者に知らせようとしているのである」と論じている(笹淵氏前掲論文)。

(10) 勝倉壽一氏は「娘の地獄堕ちは根拠に乏しい」とし、「大殿を地獄から招く者は良秀と娘の非業の死を負った画中の女臈でなければならない」とする(「地獄変」―芸術的法悦境と自裁―『芥川龍之介の歴史小説』教育出版センター、一九八三・六)。しかしこれも娘が来世でも地獄で苦しんでいるというのではなく、罪人である大殿を炎熱地獄に迎えに来たのだととれば、問題はクリアーできるのではないだろうか。

(11) この大殿の最期はドン・ジュアンの最期を思い出させる。モリエー

ル作戯曲「ドン・ジュアン」より引用してみたい（『心の花』大正二年十二月号所収草野柴二訳「団重左」より）。

重左。（苦悶の態）あ、ど、何うしたことだ。胸の中で火が燃える。あゝ、もう堪らん。軀ぢうが焔だ。あゝッ、あゝッ。

（紫電一閃。頓て電光重左の全身を浴びせ、電声段々。地面自ら破れ開けて、重左を呑み込む。重左の陥りし場所より火焔盛んに噴出す。）

好色な貴族が平民の娘を誘惑するのに失敗するという筋だてにも両者には共通項がある。ドン・ジュアンの叙述は芥川の他の著作にもいくつかみられ、遺書にも見受けられるが、「大導寺信輔の半生」（大十四・一『中央公論』）から一つ引用しておきたい。

「彼は本の上に何度も笑つたり泣いたりした。それは言はば転身だつた。本の中の人物に変ることだつた。彼は天竺の仏のやうに無数の過去生を通り抜けた。イヴアン・カラマゾフを、ハムレットを、公爵アンドレエを、ドン・ジュアンを、メフイストフエレスを、ライネツケ狐を、―」

ドン・ファン伝説をベースにした劇に、ほかにモーツァルトの歌劇「ドン・ジョヴァンニ」があるが、影響関係は不明である。しかしモーツァルトの歌劇といえば、この「地獄変」は愛娘を権力者に奪われ、芸術の力で奪還しようとするという点で歌劇「魔笛」との類似性が認められる（「魔笛」では母親が愛娘を魔法の笛つまり音楽の力で奪還しようとする。ただし「魔笛」は変な台本で、途中で母親〔夜の女王〕の方が悪者になり、最後には母親の方が地獄に落とされてしまう）。「魔笛」は大正二年六月一日から二五日にかけて帝国劇場で日本初演されているが、ちょうどこのころは芥川の一高の卒業試験前後であり、観劇した形跡はない。ただ、晩年のものではあるが、芥川自身の「魔笛」およびモーツァルトについてのコメントがある。

或雪曇りに曇つた午後、彼は或カツフェの隅に火のついた葉巻を喫へたまま、向うの蓄音機から流れて来る音楽に耳を傾けてゐた。それは彼の心もちに妙にしみ渡る音楽だつた。彼はその音楽が了るのを待ち、蓄音機の前へ歩み寄つてレコオドの貼り札を検べることにした。

Magic Flute—Mozart

彼は咄嗟に了解した。十戒を破つたモッツアルトはやはり苦しんだのに違ひなかつた。しかしよもや彼のやうに、……彼は頭を垂れたまま、静かに彼の卓子に帰つて行つた。

（遺稿『或阿呆の一生』「四十一　病」より）

（たむら・しゅういち　本学大学院博士課程）